

[27] ソマリア

1. ソマリアの概要と開発課題

(1) 概要

1969年のクーデターにより政権を掌握していたバレ政権が、1991年に反政府勢力の攻勢により崩壊して以来、ソマリアは、氏族毎の武装グループが抗争を続ける事実上の無政府状態に陥っている。劣悪な治安状況の下、大量の難民が発生し、また干ばつの深刻化等により、食糧事情が悪化する等、重大な人道危機が生じている。

1992年以降、武装勢力間の抗争の收拾を目指す国連ソマリア活動が設立され、米を中心とする統一タスクフォースが活動を開始したが、武装勢力の激しい抵抗を受け、95年3月には完全撤退を余儀なくされた。

その後ジブチの仲介による「暫定国民政府」の樹立と崩壊を経て、2004年には、周辺関係国の仲介により、ケニアにおいて「暫定連邦政府」(TFG; Transitional Federal Government) 樹立の動きが進み、大統領の選出等が行われた。翌年にはTFGはソマリアに入り、暫定首都の設置、暫定連邦議会の開設等を行った。

2008年8月には、「暫定連邦政府」と「ソマリア再解放同盟」の間で、武力行動の停止、ソマリア再建と開発のための国際会議の開催を国際社会に求めることなどの合意(「ジブチ合意」)が署名された。しかしながら、このジブチ合意に基づく和平プロセスへの参加を拒むアル・シャバーブ等の反TFG武装勢力は、その後も攻勢を強めてTFGを脅かしており、ソマリアにおける和平進捗の見通しは不透明であり、国家復興の動きは困難に直面している。また、TFGが未だに国土全体を実効的に統治し得ていない状況は、ソマリア沖・アデン湾で多発している海賊の温床ともなっている。

一方で、ジブチ合意以降の前向きな動きに対応し、我が国を含む国連安保理や関心を有する欧米、アラブ、アフリカ諸国からなるグループ(ICG; International Contact Group on Somalia)が、今後の和平進展への支援等につき、検討を行っている。

(2) 開発課題

ソマリアの産業は、伝統的には牧畜・農業が中心であり、石油資源や水産資源といった外貨獲得につながる資源に恵まれているものの、1991年1月以降の内戦により国内インフラが著しく破壊され、経済基盤は壊滅的な打撃を受けた。また、早ばつと内戦により、2002年には中南部を中心として大規模な飢餓が発生し、全人口の約3分の1に相当する150万人以上が生命の危機に瀕したとされている。かかる状況下、国内の経済・社会問題は深刻化し、貧困問題や治安機関の能力不足などから、ソマリア沖・アデン湾の海賊事案が頻発している他、周辺国への難民および国内避難民の数が急増しており、早期の内政・治安の安定がソマリア開発の前提となる。

ソマリア

表-1 主要経済指標等

指 標		2007年	1990年
人 口	(百万人)	8.7	6.7
出生時の平均余命	(年)	48	42
G N I	総 額 (百万ドル)	—	834.95
	一人あたり (ドル)	—	140
経済成長率	(%)	—	-1.5
経常収支	(百万ドル)	—	—
失 業 率	(%)	—	—
対外債務残高	(百万ドル)	2,943.63	2,370.27
貿 易 額 ^{注1)}	輸 出 (百万ドル)	—	—
	輸 入 (百万ドル)	—	—
	貿易収支 (百万ドル)	—	—
政府予算規模 (歳入)	(ソマリア・シリング)	—	—
財政収支	(ソマリア・シリング)	—	—
債務返済比率 (DSR)	(対GNI比, %)	—	1.3
財政収支	(対GDP比, %)	—	—
債務	(対GNI比, %)	—	—
債務残高	(対輸出比, %)	—	—
教育への公的支出割合	(対GDP比, %)	—	—
保健医療への公的支出割合	(対GDP比, %)	—	—
軍事支出割合	(対GDP比, %)	—	—
援助受取総額	(支出純額百万ドル)	384.15	491.39
面 積	(1000km ²) ^{注2)}	638	
分 類	D A C	後発開発途上国 (LDC)	
	世界銀行等	i /低所得国	
貧困削減戦略文書 (PRSP) 策定状況		—/HIPC	
その他の重要な開発計画等		—	

注) 1. 貿易額は、輸出入いずれもFOB価格。

2. 面積については“Surface Area”の値（湖沼等を含む）を示している。

表-2 我が国との関係

指 標		2008年	1990年
貿易額	対日輸出 (百万円)	14.38	67.00
	対日輸入 (百万円)	342.28	1,136.29
	対日収支 (百万円)	-327.90	-1,069.29
我が国による直接投資	(百万ドル)	—	—
進出日本企業数		—	—
ソマリアに在留する日本人数	(人)	—	3
日本に在留するソマリア人数	(人)	3	2

表-3 主要開発指数

開 発 指 標		最新年	1990年
極度の貧困の削減と飢饉の撲滅	所得が1日1ドル未満の人口割合 (%)	—	—
	下位20%の人口の所得又は消費割合 (%)	—	—
	5歳未満児栄養失調割合 (%)	36 (1999-2007年)	—
初等教育の完全普及の達成	成人 (15歳以上) 識字率 (%)	—	12 (1985年)
	初等教育就学率 (%)	—	—
ジェンダーの平等の推進と女性の地位の向上	女子生徒の男子生徒に対する比率 (初等教育)	—	—
	女性識字率の男性に対する比率 (15~24歳) (%)	—	—
乳幼児死亡率の削減	乳児死亡率 (出生1000件あたり)	—	—
	5歳未満児死亡率 (出生1000件あたり)	—	—
妊産婦の健康改善	妊産婦死亡率 (出生10万件あたり)	—	—
HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延防止	成人 (15~49歳) のエイズ感染率 ⁽²⁾ (%)	—	—
	結核患者数 (10万人あたり)	—	—
	マラリア患者数 (10万人あたり)	—	—
環境の持続可能性の確保	改善された水源を継続して利用できる人口 (%)	—	—
	改善された衛生設備を継続して利用できる人口 (%)	—	—
開発のためのグローバルパートナーシップの推進	債務元利支払金総額割合 (財・サービスの輸出と海外純所得に占める%)	—	—
人間開発指数 (HDI)		—	0.200

注) HDR2007 (UNDP) には、当該データが記載されていない。

2. ソマリアに対するODAの考え方

(1) ソマリアに対するODAの意義

現在、ソマリアには実効的支配を確立した政府が存在しておらず、二国間援助は困難な状況にある。このような現状において、ソマリアに対し、国際機関を通じて緊急・人道支援を中心に、国家による保護が十分でない社会的弱者を可能な限り支援していくことは、「人間の安全保障」の観点から重要である。

これまでに、飢餓に直面する同国内の被災民及び周辺国に流出した難民に対する援助として、1992年以降WFP 経由の食糧援助、UNHCR への拠出などの人道援助に加えて、UNICEF を通じて青少年の健全育成のための法整備、子供の命を守るための予防接種、蚊帳の配布等を実施してきた。

(2) ソマリアに対するODAの基本方針

ジブチ合意に基づく和平プロセス、国内の治安状況の動向等を見極めつつ、引き続き社会的弱者に対する人道支援及び治安向上のための国際機関を経由した支援を積極的に行っていく。一方、ソマリア情勢は不安定かつ流動的であるので、現地の状況を正確に把握し、これらの支援が効果的に実施されるよう、現地に事務所、駐在員等を有する国際機関との連携を更に強化する。また、地域安定の観点から周辺国における支援など地域的な支援についても検討する。

今後、ソマリアの諸指導者間の和解が進展し、我が国が承認しうる実効的支配の確立した政府が樹立された暁には、ソマリア側の援助受け入れ態勢の整備、治安状況の回復等の状況を見極めつつ、積極的に支援していくことを検討する。

3. ソマリアに対する2008年度ODA実績

2008年度までのソマリアに対する援助実績は、円借款 64.70 億円、無償資金協力 213.56 億円 (以上、原則、交換公文ベース)、技術協力 8.71 億円 (JICA 経費実績ベース) である。2008年度については、WFP、ICRC、UNICEF、UNHCR、IOM 等の国際機関を経由し、ソマリア国内における国内避難民等脆弱者支援、食糧援助、周辺国でのソマリア難民支援を実施した。

ソマリア

4. 留意点

ソマリアにおいては、我が国が承認しうる実効的支配の確立した政府が存在しておらず、二国間援助は困難な状況にあることから、当面は、国際機関を通じた支援が主とならざるを得ない。各ドナー国・機関が実施している支援の効率を高めるための援助協調に向けた試みが行われているが、国内の政治・治安状況が流動的であることから、国内情勢を注意深くフォローしつつ、各種援助を行っていく必要がある。

表-4 我が国の年度別・援助形態別実績（円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース）
（単位：億円）

年度	円 借 款	無償資金協力	技 術 協 力
2004年	—	2.08	—
2005年	—	—	—
2006年	—	3.60	—
2007年	—	3.00	0.01 (-)
2008年	—	28.21 (28.21)	0.04
累 計	64.70	213.56 (28.21)	8.71

- 注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。
 2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。草の根・人間の安全保障無償資金協力和日本NGO連携無償資金協力、草の根文化無償資金協力に関しては贈与契約に基づく。
 3. 円借款の累計は債務繰延・債務免除を除く。
 4. 2004～2007年度の技術協力においては、日本全体の技術協力事業の実績であり、2004～2007年度の（ ）内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2008年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計についてはJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。

表-5 我が国の対ソマリア経済協力実績

（支出純額ベース、単位：百万ドル）

暦 年	政府貸付等	無償資金協力	技 術 協 力	合 計
2004年	—	—	—	—
2005年	—	—	—	—
2006年	—	0.24 (0.24)	—	0.24
2007年	—	3.85 (3.85)	0.01	3.86
2008年	—	23.24 (23.24)	0.03	23.27
累 計	38.70	106.90 (27.33)	5.46	151.10

出典) OECD/DAC

- 注) 1. 従来、国際機関を通じた贈与は「国際機関向け拠出・出資等」として本データブックの集計対象外としてきたが、2006年より拠出時に供与先の国が明確であるものについては各被援助国への援助として「無償資金協力」へ計上する事に改めた。（ ）内はその実績(内数)。
 2. 政府貸付等及び無償資金協力はこれまでに交換公文で決定した約束額のうち当該暦年中に実際に供与された金額(政府貸付等については、ソマリア側の返済金額を差し引いた金額)。
 3. 技術協力は、JICAによるもののほか、関係省庁及び地方自治体による技術協力を含む。
 4. 四捨五入の関係上、合計が一致しないことがある。
 5. 政府貸付等の累計は、為替レートの変動によりマイナスになることがある。

表-6 諸外国の対ソマリア経済協力実績

（支出純額ベース、単位：百万ドル）

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	うち日本	合 計
2003年	ノルウェー 40.02	米国 33.75	オランダ 10.29	イタリア 7.80	スウェーデン 6.59	—	113.56
2004年	ノルウェー 33.69	米国 31.92	オランダ 18.94	イタリア 16.18	スウェーデン 13.71	—	139.72
2005年	米国 36.95	ノルウェー 31.32	オランダ 14.24	スウェーデン 12.94	イタリア 11.08	—	146.06
2006年	米国 95.22	英国 53.15	ノルウェー 33.77	オランダ 14.05	スウェーデン 13.26	0.24	263.14
2007年	米国 58.70	ノルウェー 43.14	英国 26.37	スウェーデン 25.81	ドイツ 13.58	3.86	256.70

出典) OECD/DAC

表-7 国際機関の対ソマリア経済協力実績

(支出純額ベース、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	その他	合計
2003年	CEC 40.06	UNICEF 5.10	UNHCR 4.38	UNDP 4.30	UNTA 3.54	2.75	60.13
2004年	CEC 35.69	UNDP 4.96	UNICEF 4.75	UNTA 3.09	WFP 1.65	8.15	58.29
2005年	CEC 57.29	UNICEF 7.86	UNDP 6.31	WFP 5.21	UNTA 3.86	12.17	92.70
2006年	CEC 88.54	UNICEF 7.44	UNDP 6.65	WFP 4.36	UNTA 2.72	16.06	125.77
2007年	CEC 78.62	UNICEF 11.96	UNDP 9.62	UNTA 2.97	WFP 2.62	18.01	123.80

出典) OECD/DAC

注) 順位は主要な国際機関についてのものを示している。

表-8 我が国の年度別・形態別実績詳細 (円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース)

(単位：億円)

年度	円 借 款	無 償 資 金 協 力	技 術 協 力
2003年度までの累計	64.70億円 (内訳は、2008年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html))	176.67億円 (内訳は、2008年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html))	8.68億円 研修員受入 95人 専門家派遣 21人 調査団派遣 44人 機材供与 106.03百万円
2004年	なし	2.08億円 緊急無償(「平和の定着」支援 (UN-HABITAT経由)) (2.08)	なし
2005年	なし	なし	なし
2006年	なし	3.60億円 食糧援助(WFP経由) (3.60)	なし
2007年	なし	3.00億円 食糧援助(WFP経由) (3.00)	0.01億円(-)
2008年	なし	28.21億円 国際機関を通じた贈与(8件) (28.21)	0.04億円 調査団派遣 1人
2008年度までの累計	64.70億円	213.56億円	8.71億円 研修員受入 95人 専門家派遣 21人 調査団派遣 45人 機材供与 106.03百万円

注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。

2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。草の根・人間の安全保障無償資金協力和日本NGO連携無償資金協力、草の根文化無償資金協力に関しては贈与契約に基づく。

3. 円借款の累計は債務繰延・債務免除を除く。

4. 2004～2007年度の技術協力においては、日本全体の技術協力の実績であり、2004～2007年度の()内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2008年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計についてはJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。

5. 調査団派遣にはプロジェクトファイディング調査、評価調査、基礎調査研究、委託調査等の各種調査・研究を含む。

6. 四捨五入の関係上、累計が一致しないことがある。

図-1 当該国のプロジェクト所在図は714頁に記載。